

## 『黒衣の王子』にみる愛の力

小野 順子

『黒衣の王子』は、物語の本体をなす一人称の物語（ブラッドリーの物語）、小説の編集者とブラッドリーによる序、さらにブラッドリー、主要な登場人物と編集者による後記が付け加えられているという構成になっている。主要な登場人物は、「ブラッドリーの物語」は真実を伝えていないと書く。しかし「ブラッドリーの物語」を深く読んだ人には、彼らの書いた後記は、「ブラッドリーの物語」の人物ならこのように書く、すなわち、彼らにしか書けない後記であることが判る。それ故に発表者は、彼らの後記は、ブラッドリーの人物描写が的確であることを証明し、彼の本が真実に近いことを示していると考ええる。

「ブラッドリーの物語」において描かれたブラッドリーのジュリアンへの性愛が、本を書く源泉になることを見る。さらに性愛が至高の愛へと変容することについて考察する。マードックは、ティツィアーノの作品『マルシユアスの処刑』において死を目前にしたマルシユアスの顔に微笑みを見、その微笑みを「自我の死」と解釈している。ブラッドリーの到達した境地が、マードックの考えるいまわの際のマルシユアスの境地に近いものであることを明らかにする。

ブラッドリーの『ハムレット』への心酔が、ジュリアンへの性愛、ブラック・エロス（愛する人を渴望し、その人の肉体を所有したいという愛）を喚起する。ジュリアンもブラッドリーの愛を受け入れ、二人は、パタラという名の海辺のバンガローへと逃避行する。ブラッドリーは、後に監獄でアポロの化身、ロクシアスに出会うことになるので、この地名をパタラとした。ジュリアンは、ハムレットの衣装を着て、浜辺で拾った波で洗われた羊の頭蓋骨を持ってブラッドリーの前に現れる。彼は、ハムレットに喚起されるように、激しい欲望に襲われ、思いを遂げる。彼女は、彼の激情に驚きながらも、彼の行為を愛の行為とし

て受け入れる。

ブラッドリーはジュリアンと結ばれた後、二人の体は、霊的交感に包まれていると感じる。彼にとって、ジュリアンは、性愛の対象であるだけでなく、人間界と神の国（霊的世界）との仲介者のような神格化されている存在になっていく。ジュリアンも、彼と一体化する愛の恍惚感に浸る。性愛の極致を体験した彼は、経験したことの無い力、本を書く力を得たように感じる。性愛は、芸術、美、知識などを求める創造の型と神を求める道徳性と同じ人間の欲望である。エロスは、性愛という人間の欲望を高い道徳と創造する力に結びつける仲介する霊である。エロスなくしては、創造する力も、崇高なものを求める道徳も存在しない。ブラッドリーは、ジュリアンと結ばれることによって「ブラッドリーの物語」を執筆する力を得る。

無実の罪で起訴されたブラッドリーを支えたのは、ジュリアンへの愛と愛の体験への感謝である。彼は、ジュリアンとの愛の成就を奇跡とみなす。奇跡への代償として、不当に裁かれる苦しみを受容する。彼は、レイチェルを赦し、アーノルドとプリシラの死に責任を感じる。ジュリアンへの性愛は、ジュリアンの幸せを願う「無私の愛」へと昇華する。

アポロの化身である獄中の友人、ロクシアスの励ましで、彼はジュリアンへの愛を描いたこの本の執筆へと向かう。無実の罪で獄中に繋がれるという苦しみを受け、その苦しみを他者に転化することなく純粹に苦しみながら、ジュリアンに捧げる物語を執筆する過程において、ブラッドリーは賢明な人になっていく。彼は、人々がいかにか違った人格をもっているか、そして何故違っているのかを寛容な愛情に満ちた目で見ることができるようになり、真実に近いこの物語を書くことができた。マードックは、「性愛を経て人は、

至高の愛を得ることができる。性愛は、私たちに創造的徳へと変容できるエネルギーを与える」(Existentialists and Mystics 416)と信じている。マードックは、試練を経てジュリアンへの性愛が彼女への無私の愛へと変容し、自分に罪をきせたレイチェルを許し、周囲の人を思いやる人になったブラッドリーを描くことによって自分の信念を伝えている。

物語が完成したという達成感と、ジュリアンは永遠にこの物語の中で生き続けるという思いによって、ブラッドリーは自己の執着から解き放たれていったと推察される。彼は、過去を悔み、明

日を思い悩むことを止めて、現在を大切に生きるという気持ちになる。苦悩と試練を経なければ得られないと言われ、ほとんどの人間にとって到達不可能な最終段階である「自我の死」、自我の超克に近い境地に彼が至ったと考えられる。

無実の罪で獄に繋がれながら、この物語を執筆する彼の姿は、皮を剥がれて苦しむマルシユアスの姿と重なる。力を出し切って物語を書き上げ、全てを受け入れているブラッドリーの心境は、精一杯生き、笑顔を浮かべて死んでいったマードックの考えるマルシユアスの境地（自我の死）に近いものである。